

10. 理学研究科

(分析項目Ⅰ 教育活動の状況 30)

(分析項目Ⅱ 教育成果の状況 31)

分析項目Ⅰ 教育活動の状況

〔判定〕 高い質にある

〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

スーパーグローバル大学創成支援事業「ジャパングートウェイ」の数学系ユニットの数学コースやコチュテル型のダブルディグリープログラムでは、海外の大学・研究機関との研究指導委託制度などにより国際的な研究指導を展開すると共に、研究環境の国際化を行っている。正規学生としての留学生受入数も増加している。また、データ同化の講義による分野横断型教育にも取り組んでいる。

〔優れた点〕

- 京都大学のスーパーグローバル大学創成支援事業「ジャパングートウェイ」の数学系ユニットでは、KTGU 数学コースを設け、コース登録した理学研究科数学・数理解析専攻の大学院生に対し、海外大学・研究機関の研究者を副指導教員として、京都大学の主指導教員と共同で学位の指導を行っている。登録学生は学位申請までに一定期間を副指導教員の所属大学など海外に滞在して研究を行い、また学位審査には副指導教員が審査にも関わる。コース修了者には、学位記に加えて、京都大学総長名でコース修了認定証が発行される。平成 28 年度から令和元年度までに 4 年間で合計 22 名の学生がコース修了した。副指導教員の所属大学は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（米国）、スタンフォード大学（米国）、ブラウン大学（米国）、ミシガン大学（米国）、インペリアル・カレッジ・ロンドン（英国）、ボン大学（ドイツ）、ギーセン大学（ドイツ）、パリ高等師範学校／パリ第 7 大学（フランス）、ボローニャ大学（イタリア）、シンガポール国立大学（シンガポール）などである。
- 「数理を基盤として新分野の自発的創出を促す理学教育プログラム」（略称：MACS 教育プログラム）は、平成 28 年度より始まった理学研究科の概算要求事業である。これは、数理を基盤として理学 5 分野を横断する融合研究を推進し、狙ってもできない新たな学問分野の自発的創出を促すとともに、分野横断的課題の発見と解決に学際的な視点から取り組むことができる優れた若手研究者や科学人材を育成するための教育を行うことを目指して活動を続けている。特に新たな学際的分野として「データ同化 A、B」の講義を開講し、専攻を横断する学術分野の形成に向けた教育と研究に取り組んでいる。MACS 教育プログラムは平成 30 年度に外部評価を行い、海外からの委員も含む外部評価委員により、高い評価を受けた。

- 各専攻において、留学生の受入れには積極的に取り組んでおり、正規生の受入れ数は増加傾向にある。

令和元年度（修士 54 名 博士 96 名）

平成 30 年度（修士 42 名 博士 85 名）

平成 29 年度（修士 21 名 博士 82 名）

平成 28 年度（修士 14 名 博士 71 名）

【特色ある点】

- 数学・数理解析専攻では、平成 30 年にフランスのリヨン高等師範学校（ENS de Lyon）の純粋・応用数学専攻との間に、コチュテル型のダブルディグリープログラムを締結し、ENS de Lyon から 1 名の学生を受け入れている。コチュテル型のダブルディグリープログラムは、個々の学生に応じてテーマや指導教員を柔軟に設定して行う、いわばテーラーメイドのダブルディグリープログラムである。在籍学生は半年ごとに双方の大学を移動し、それぞれの大学での指導教員の下で順調に研究を継続しており、標準の年限内に学位が取得できる見込みである。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

【判定】 相応の質にある

【判断理由】

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。